



Title	国防色の雨合羽
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	ほけかんだより, 95, 1-1
Issue Date	2009-05-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/38590
Type	column
File Information	hemmi.pdf



[Instructions for use](#)



国防色の雨合羽

理事・副学長 逸見勝亮

◇養父寛一（1912年3月1日～1985年11月25日）は、右手親指・薬指・小指を、左手首を戦傷で失った「傷痍軍人」であった。最初は現役で従軍して除隊、数年後に再召集されて負傷したとは聞いたが、負傷場所・時日確かめる機会を持たぬままに他界した。軍隊手帳を見たことがあったが、現在は散逸して軍歴の詳細は不明である。職歴も天津の商社で働いていたという程度にしか知らない。母と再婚した1954年には文房具・小間物を扱うごく小さな商店を営んでいたが、それもいつからだったのかを訊ねたことがなかった。

◇常に右手に包帯を巻き、左腕を毛糸で編んだカバーの上に先をとじた黒い腕抜きを重ねていた。食事は右手指を嵌めこむよう工夫したスプーンで摂った。食器を携行しなければならない外食を好まなかった。晩酌は必ず日本酒コップ一杯。来客に酒を振る舞う際には、自身も酒量が嵩んだが、酩酊することはなかった。包帯を巻き付けたボールペンを、人差し指と中指の間に挟んで文字を書いた。筆圧は弱く、カーボン紙を挟んだ複写書類を書くのは億劫であったろう、納品書・請求書などは僕に書かせ、「字体が似ている」と嬉しそうに話した。僕は気が付けばすぐ代わったが、剣先スコップやツルハシを使う力仕事を苦にしているようには見えなかった。1955年に母が倒れた折には、右手の包帯をはずして米を研いでいた。要するに養父は、不自由な身体でありながら頑健であり、ひとりでもできた。そして、我が身を嘆いたことがない。

◇僕は普段から登校前・放課後はもっぱら店番。鷲別神社の祭礼と正月には、店先でリンゴ箱の上に戸板を敷いて、子ども向けの商品を並べた。ここの店番も僕の仕事であった。こともなげに10万円を問屋に届けるよう言いつけられたことがあった。12歳には大役である。千円札100枚を風呂敷に包み、腹に巻いて運んだ。バスの中でも、遠くを見詰めるよう努力した。1955年から2年ほどは『北海タイムス』販売店でもあった。どう話をつけたのか、宣伝の一環で鷲別小学校体育館で映画上映会を行った。機材を駅からリアカーで運搬し

観覧料の徴収するのは僕の仕事。映写機とフィルムは重かった。鞍馬天狗（嵐寛十郎）が登場すると拍手がおきたが、「血槍富士」（監督：内田吐夢、1955年）で主の仇を討つ槍持ち足軽・片岡千恵蔵はひとびとを無言にした。この上映会が僕の映画開眼である。

◇通学時の雨具はゴム長靴とマント状の雨合羽であった。カーキ色（国防色）・木綿地の合羽は養父が使用していたものである。同様の雨具を身につけている級友も大人も見ただことはない。書斎整理がてら、『日本の軍装』（中西立太、大日本絵画、1991）を繙いていて、僕が着ていた合羽は十字印を除けば陸軍患者マントと同じだと知った。雨合羽は、戦傷を負った養父に支給された陸軍患者マントである。裏地がなく薄いギャバジンの合羽は、仙台への修学旅行（中学3年）の折りに、「バーバリーコート」と通称されるレイン・コートに代わった。母が選んだ新しいコートの生地は濃紺、固く厚いギャバジンであった。

◇養父は無口であったが、時に人をからかうこともあった。僕が小雨の沼から15cmのフナを釣り帰ったとき、竹竿のしなり具合はと冷やかした。その日、僕は肩から雨のしみこむに任せて国防色の雨合羽を着て、釣りに興じていた。心筋梗塞で長く寝込んで膝が弱ってしまっただけなら、椅子から立ち上がるときに身体を支えるには、養父の両手は不自由に過ぎた。両手が健常であれば、生きる意欲は違っていた。手助けを求める眼差しに哀しみがあつた。「国防色」が死語になってから、戦傷は最後に恨めしく作用した。



陸軍患者マント（カーキ防水布）
（『日本の軍装』20頁）